

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

国民文学作家アブドゥラ・フサインが紡ぐマレーシアとスマトラの縁

西芳実（京都大学東南アジア地域研究研究所准教授）



ムスリム世界映画祭での『イマーム』上映にマレーシアから招かれたゲストと共に（筆者提供）

2025 年 9 月、インドネシアで開催されたムスリム世界映画祭でマレーシア映画『イマーム (Imam)』が上映された。この映画の原作はマレーシアの国民的作家アブドゥラ・フサインによる同名の小説である。

彼はスマトラ島アチェ出身の父を持ち、クダ州で生まれ育った。アジア太平洋戦争の始まりとともにスマトラに渡り、日本軍占領期とインドネシア独立戦争期をスマトラで過ごした後、マレーシアに戻って作家としての地位を確立した。彼の人生はマレーシアとスマトラ（インドネシア）を往還する軌跡である。

映画『イマーム』の主人公は、1963 年にサラワクとインドネシアの国境地帯での戦闘に参加した元兵士である。負傷して村に戻ってきた彼はイマームになり、村の改革に取り組もうとする。村人たちが彼を支持する一方で、古くからの指導層や既得権を持つ人々の反発は強まっていく。その中には、村外の人たちを動員して礼拝の会衆を増やし、別のイマームを立てることで主人公の影響力を相対化しようとする動きもあった。

信仰の問題でありながら、同時に「村の政治」としての力のぶつかり合いでもあった。主人公は対立をおおるような姿勢を取らず、波風を立てずに物事を進めようとするが、その思いは届かず、ついに命を奪われる。

この作品はイマームとは何かを改めて問いかける。イマームとは、モスク（イスラム教礼拝所）での集団礼拝の際に信者の前に立って祈りを導く存在であると同時に、日々の振る舞いにおいて他者の模範となることが求められる人物である。「前に立つ」「上に立つ」とは、権限や決定権を持つことの前に、まず自らの姿勢や行動によって人々を導こうとすることではないかと問うている。

インドネシアでの上映会には、アブドゥラ・フサインの妻と共に、故サヌシ・ジュニド元農業大臣・元クダ州首相の妻がマレーシアからのゲストとして招かれた。サヌシ・ジュニドの妻は 1950 年代にアチェでイスラム改革運動を行って後にインドネシア政府から反乱者とされたダウド・ブルエの孫であり、マレーシアとスマトラ（アチェ）をつなぐ歴史の縁が確かめられた。

マレーシアとアチェの間には古くから人の移動があった。ペナン州やクダ州にはアチェに由来する集落やモスクが今も存在する。国民的映画監督の P・ラムリーのように、マレーシアにはアチェ系として知られる著名人もいる。アブドゥラ・フサインもそうした系譜の中にいる一人である。

マレーシアに暮らしていると、「マレーシアはマレーシア、インドネシアはインドネシア」と分けて考えてしまいがちである。しかし、文学や映画、人々の記憶をたどっていくと、マレーシアとインドネシア、とりわけマレーシアとスマトラの間には海峡を越えてつながる時間が静かに息づいている。

< 筆者紹介 >

1971 年東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了、学術博士。1997～2000 年にインドネシア・アチェ州シアクアラ大学に留学。専門はインドネシア地域研究。主著に『災害復興で内戦を乗り越える スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』（京都大学学術出版会）『夢みるインドネシア映画の挑戦』（英明企画編集）などがある。2025 年度大同生命地域研究奨励賞を受賞。